

Title	東日本先史時代土器編年における標式資料・基準資料の基礎的研究
Sub Title	A basic study of the standard examples of the chronological types
Author	安藤, 広道(ANDO, HIROMICHI)
Publisher	
Publication year	2009
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2008.)
JaLC DOI	
Abstract	本研究では、東日本先史時代土器の編年研究を進める上で重要な意味をもつ、既発掘未報告資料（青森県最花貝塚遺跡A地点、八幡堂遺跡、剣吉荒町遺跡出土土器）の資料化と型式学的分析を行った。その結果、これまで内容が不明確であった東北北部縄文時代中期「最花式」の再設定、東北北部縄文時代晩期～弥生時代前期の土器編年や弥生時代の開始時期等の課題に対し、基準・標式資料の提示をはじめ、これまでの研究の問題点の指摘、編年試案の提示等を行うことができた。
Notes	研究種目：基盤研究(C) 研究期間：2006～2008 課題番号：18520589 研究分野：人文学 科研費の分科・細目：史学・考古学
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_18520589seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

平成 21 年 6 月 8 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520589

研究課題名（和文） 東日本先史時代土器編年における標式資料・基準資料の基礎的研究

研究課題名（英文） A basic study of the standard examples of the chronological types of prehistoric pottery in Eastern Japan.

研究代表者

安藤 広道（ANDO HIROMICHI）

慶應義塾大学・文学部・准教授

研究者番号：80311158

研究成果の概要：

本研究では、東日本先史時代土器の編年研究を進める上で重要な意味をもつ、既発掘未報告資料（青森県最花貝塚遺跡A地点、八幡堂遺跡、剣吉荒町遺跡出土土器）の資料化と型式学的分析を行った。その結果、これまで内容が不明確であった東北北部縄文時代中期「最花式」の再設定、東北北部縄文時代晩期～弥生時代前期の土器編年や弥生時代の開始時期等の課題に対し、基準・標式資料の提示をはじめ、これまでの研究の問題点の指摘、編年試案の提示等を行うことができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,500,000	0	1,500,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	570,000	3,970,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：縄文土器・弥生土器・土器型式・編年研究・最花式土器・大洞A'式土器・砂沢式土器・遠賀川系土器

1. 研究開始当初の背景

(1)土器の編年研究は、縄文時代、弥生時代研究の基盤的研究として、これまで最も多くの研究成果が蓄積されてきた分野である。その蓄積によって、現在、日本列島の先史時代土器の編年体系は、きわめて精緻なレベルで整理されてきている。その成果は、世界のどの地域・時期の相対編年研究の追隨も許さないほどであり、世界に向けて積極的に発信できる、日本考古学の方法論・研究成果上の財産として認識すべきものである。近年、AM

Sによる年代測定と暦年較正による、先史時代の絶対年代の議論が盛んに行われているが、そこにおいて細かな議論が可能になったのも、この編年研究の蓄積があったからである。

(2)全国的に精緻な編年体系の整備が進められているとはいえ、資料的制約等の問題から、その整備が遅れている地域・時期があることも事実である。また、研究が進んでいる地域・時期であっても、より精緻な編年体系の

構築を目指して、編年研究自体は、今後も積極的に進められていく必要がある。こうした考古学によるより精緻な相対編年の研究成果と、理化学的年代測定との対比を進めることによって、世界に誇れる先史時代の年代学的研究が可能になるものと考えられる。

(3)日本には、過去に発掘された資料に、その成果が十分に公開されていないもの(既発掘未報告資料)が数多く存在しており、こうした資料の研究資源としての価値を再評価すべき時期にきている。その中には、土器編年上の標式資料とされてきたものや、未だ基準となる良好な資料に恵まれていない地域・時期の資料も少なからず含まれており、そうした地域・時期では、結果的に編年研究の進展に遅れがみられることが多い。つまり、土器編年上の標式資料・基準資料を含む、既発掘未報告資料の整理・分析を行うことで、未だ精緻な土器編年が確立されていない地域・時期の編年研究を、大きく前進させることが可能になるのである。

2. 研究の目的

(1)本研究の目的は、既発掘未報告の標式資料・基準資料の資料化を行い、その型式学的分析、年代測定等の分析を通じて、東日本先史時代土器編年の基盤整備を進めることにある。

(2)研究代表者の所属する慶應義塾大学民族学考古学研究室には、東日本を中心に、標式資料・基準資料を含んだ既発掘未報告資料が多数存在する。

こうした既発掘未報告資料の研究資源としての価値を提示することも本研究の大きな目的の一つである。

3. 研究の方法

(1)本研究では、縄文時代中期後葉～後期初頭、縄文時代晩期後葉～弥生時代前期の二つの時期に焦点を当て、これらの時期の標式資料や基準資料となり得る資料を含む既発掘資料の整理・分析を行うことにした。

縄文時代中期後葉～後期初頭の資料としては、青森県むつ市最花貝塚遺跡出土資料を選択した。

最花貝塚遺跡出土資料は、縄文時代中期後葉、最花式の標式資料を含む、中期後葉～後期初頭の多量の土器群からなる。最花式土器は、この標式資料の整理・分析が未了であるが故に、研究者間でその理解の相違が大きくなってしまっている土器型式である。

(2) 縄文時代晩期後葉～弥生時代前期の資

料としては、青森県南部町剣吉荒町遺跡と青森県佐井村八幡堂遺跡出土資料を選択した。

八幡堂遺跡出土資料は、縄文時代晩期後葉～弥生時代中期、大洞 A2 式から宇鉄式土器からなっている。未だこの時期の資料の蓄積が十分ではない、下北半島の大洞 A' 式前後の編年研究を進めるうえで、第一級の資料と評価できる。

剣吉荒町遺跡出土資料は、弥生時代前期、砂沢式土器を主体とする。本資料には、所謂「遠賀川系土器」が少なからず含まれており、砂沢式土器をめぐる編年研究はもちろんのこと、「遠賀川系土器」のあり方を詳細に分析することが可能になるものと思われる。

(3)以上、3つの遺跡の出土土器について、まず、水洗、注記、接合等の基礎的整理を行い、実測・拓本・観察表の作成等の資料化を進める。

(4)資料化の作業と並行して、過去の発掘調査時の記録類の収集を行い、資料の出土状況等についての情報を整理する。

(5)炭化物の付着している資料については、AMSによる年代測定を行う。

(6)二つの時期にかかわる従来の編年研究の成果をまとめ、現時点における課題を明らかにしたうえで、3つの遺跡の出土資料を中心に型式学的分析を行い、年代測定の成果等を踏まえて、編年試案の提示を行う。

4. 研究成果

(1)本研究の研究成果は、『研究成果報告書』(A4版159頁)にまとめた。報告書は、「資料報告」と「研究報告」の2編からなる。

(2)「資料報告」では、青森県最花貝塚遺跡 A 地点、八幡堂遺跡、剣吉荒町遺跡の発掘調査の概要をまとめうえで、出土土器の実測図・拓本、観察表(最花貝塚:177点、八幡堂:213点、剣吉荒町:125点)を提示した。

(3)「研究報告」においては、以下の5編の論考を収録した。「1. 最花貝塚遺跡の調査と最花式土器」(安藤広道・安達香織)「2. 下北地域における初期弥生土器編年」(大坂拓)「3. 剣吉荒町遺跡出土の類遠賀川系土器について」(櫻井はるえ)「4. 剣吉荒町遺跡出土土器における遠賀川系要素のあり方」(安藤広道)「付編 剣吉荒町遺跡・八幡堂遺跡出土土器付着物の¹⁴C年代測定」(小林謙一・遠部慎・坂本稔)

(4)最花貝塚遺跡 A 地点出土土器の分析の最

大の成果は、これまで実態が不明と言われ続けてきた「最花式」の標式あるいは基準となる資料を提示できたことである。もちろん、ここで報告した資料は、江坂氏による「最花式」設定当初の標式資料そのものではないが、最花貝塚遺跡の発掘調査の歴史、そして「最花式」をめぐる研究史を紐解くことで、この資料を標式・基準として、「最花式」を再設定すべきであることが明らかになった。

本研究では、「最花式」の再設定には至らなかったが、それは、最花貝塚遺跡A地点出土土器の整理・分析を進めるなかで、東北地方北部の縄文時代中期後葉～末葉の土器編年が大きな問題を内包しており、今後、全体に及ぶ再構成が必至であると認識するようになったからでもある。「最花式」の再設定は、より広い研究の枠組みのなかで議論をしていかなければならない。

東北地方北部の該期の土器群は、円筒上層式土器から続く要素と、大木8b式、9式によって付加された要素が絡み合うことで、さまざまな地域的・時期的様相を示しているようであり、その年代学的整理には、従来の型式の再検討と、新たな型式の設定が不可欠と考えている。今後は、最花貝塚遺跡A地点出土土器を標準にした「最花式」の再設定を基点にして、縦横に連鎖した型式による年代学的組織の再構築へと進んでいかなければならない。

(5)八幡堂遺跡出土土器の分析についても、まずは大洞A2式から砂沢式の資料が少ない下北半島における、該期の良好な資料を提示できたことが大きな成果となった。この資料が、下北半島のみならず、東北地方全体においても、今後重要な位置を占めるようになっていくことは疑いない。

八幡堂遺跡出土土器には、大洞A2式とA'式の区分、A'式の細分、A'式と砂沢式の区分、砂沢式の細分等、該期の編年研究上のさまざまな問題を検討し得る、非常に多くの情報が含まれていることは間違いない。大洞A2式の内容に関しては、その型式名を使用するか否かという点を含め、必ずしも共通した見解があるわけではない。八幡堂遺跡出土土器には、大洞A2式の指標とされる「変形匹字文」を持つ個体が少ないという特徴があり、大洞A2式の地域差や、「変形匹字文」の消長を検討するうえで、興味深い内容を持つと評価することができる。

また、大洞A'式と砂沢式の区分や、砂沢式の細分も、現在、研究者ごとの意見に少なからぬ違いが認められるところである。八幡堂遺跡出土土器には、砂沢式の古い段階、あるいは人によっては大洞A'式に含める土器がまとまっており、これらの問題を検討し得る格好の資料になるものとする。大洞A'式と

砂沢式の区分は、当然のことながら、東北地方北部の縄文・弥生の時代区分に直結する問題であり、その意味でも、八幡堂遺跡出土土器は、重要な鍵を握る資料ということができる。

本研究では、大坂拓が、八幡堂遺跡出土土器の微視的な分析を踏まえた、下北地域の編年試案を提示している。この編年試案が、今後の編年研究において叩き台になっていくことに期待したい。

(6)剣吉荒町遺跡出土土器については、遠賀川系の要素をもつ土器の抽出という点に主眼を置いた。今回の報告において、遠賀川系的様相の強い土器群を提示することができ、馬淵川・新井田川流域の遠賀川系の要素をもつ土器の特徴の一端を、改めて確認できたことの意義は小さくないと考えている。とりわけ、これまであまり知られていなかった、削り出し突帯や段をもつ壺形土器や、遠賀川系土器にきわめて近い特徴をもつ甕形土器、蓋形土器などは、東北地方における遠賀川系要素の定着・展開の具体相を考察するうえで、今後、重要な資料になっていくはずである。

本研究において櫻井はるえによって示された、東北地方北部への遠賀川系要素の定着時期が、これまで想定されてきた大洞A'式期ではなく、砂沢式期に下る、との指摘は重要である。仮に櫻井の指摘が正しいとすると、剣吉荒町遺跡にみられるような定着初期の様相を示す遠賀川系の要素が、いずれも近畿第 様式中段階に遡ることからみて、砂沢式の一部を近畿第 様式中段階に並行させざるを得なくなるはずである。また、遠賀川系要素の定着が砂沢式期であるとすれば、水田稲作技術をはじめとするその他の弥生文化系の要素の定着時期、及びその展開過程との関係も、改めて問い直さなければならなくなる。それは、当然、東北地方北部における縄文・弥生の時代区分の議論とも深く関わってくることになる。

(7)本研究では、小林謙一氏、遠部慎氏、坂本稔氏の御協力により、八幡堂遺跡出土土器と剣吉荒町遺跡出土土器の、年代測定を実施することができた。

研究計画当初は、最花貝塚遺跡A地点出土土器も含め、より多くの資料の年代を測定したいと考えていた。しかし、すでに洗浄が行われていた資料の炭化物の遺存状態は予想以上に悪く、結果的に最も期待をしていた最花貝塚遺跡出土土器は1点も測定できず、八幡堂遺跡、剣吉荒町遺跡出土の3点の資料の測定にとどまってしまったのは残念であった。また、3点のうち、内面の付着物を測定した2点については、海洋リザーバー効果によると思われる古い測定値が出ており、外面

の付着物を測定した1点も、当初より予想されていたことではあるが、年代を絞り込めない「2400年問題」の中の測定値となった。

今回の測定が土器型式の実年代推定には厳しい結果となったことは否めないが、砂沢式期の測定値を一つ加えられたことは重要な成果に違いなく、古い測定値が出た内外面付着物についても、食性復元という観点からみれば、興味深いデータになったと評価しておきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 1件)

安達香織 「最花式土器の研究」三田史学会民族学考古学部会 2007年6月23日 慶應義塾大学

〔図書〕(計 1件)

安藤広道、安達香織、大坂拓、櫻井はるえ、小林健一、遠部慎、坂本稔 『東日本先史時代土器編年における標式資料・基準資料の基礎的研究 研究成果報告書』 A4版 159頁 慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室(非売品) 2009年

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安藤 広道 (ANDO HIROMICHI)
慶應義塾大学・文学部・准教授
研究者番号：80311158

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

安達 香織 (ADACHI KAORI)
慶應義塾大学大学院・文学研究科・
博士後期課程

大坂 拓 (OSAKA TAKU)
明治大学大学院・文学研究科・
博士後期課程

櫻井 はるえ (SAKURAI HARUE)
明治大学大学院・文学研究科・
博士前期課程(2007年度まで)